

地域との協働を通じたまちづくり学習の展開：高野 山中学校「ふるさと学習」における4年間の取り組み

浦井，亮太郎

東京大学大学院工学系研究科先端学際工学専攻：博士後期課程

小泉，秀樹

東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻

新，雄太

東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻

古賀，千絵

東京大学先端科学技術研究センター

他

<https://doi.org/10.15017/7162032>

出版情報：都市・建築学研究．45，pp.23-36，2024-01-15．九州大学大学院人間環境学研究院都市・建築
学部門

バージョン：

権利関係：



地域との協働を通じたまちづくり学習の展開 - 高野山中学校「ふるさと学習」における4年間の取り組み - Evolving Town Development Learning Through Collaboration with Local Communities -Four Years of Practice in "Hometown Study" at Koyasan Junior High School-

浦井亮太郎*, 小泉秀樹**, 新雄太**, 古賀千絵***, 梁イエリム***, 菊地成朋****
Ryotaro URAI, Hideki KOIZUMI, Yuta SHIN, Chie KOGA, Yerim YANG, and Shigetomo KIKUCHI

In this research, we delved into the “hometown study” initiative at Koyasan Junior High School, in the span of four years from 2020 to 2023. It clarified the transitions of hometown study for four years through organizing and analyzing the entire process of community development learning, from its initial planning stages to its actual implementation. The findings revealed that precisely understanding local conditions and needs and reflecting them in learning programs and educational methods as necessary will lead to the evolution of community development learning.

Keywords: Town development learning, Junior high school, Comprehensive study time, Community cooperation, Koyasan
まちづくり学習, 中学校, 総合的な学習の時間, 地域協働, 高野山

1. はじめに

1.1. 研究の背景と目的

多くの地方地域が人口減少という深刻な課題に直面している中、地域の魅力や潜在的な価値を認識できず、地域から流出する人が絶えない。この問題への対応策として、子供たちに地域の価値を認識させ、地域づくりへの参加意識を高めることを目的とするまちづくり学習が各地で実施されている。まちづくり学習に関する多くの先行研究は、学習プログラムの実施過程における生徒の学習効果に主眼を置いているが、教育者側の意識や指導方法の変化と、それによる生徒の学習効果への影響を分析する研究は乏しい^{注1)}。そのため、まちづくり学習を実施したい教育関係者はプログラムの再現や自校への適用に際して難しさを感じている。

このギャップを埋めるため、本研究は生徒だけでなく、教育者（教員・コーディネーター・地域住民）の変化や、生徒と教育者の相互作用によるまちづくり学習の内容の変化を包括的に分析し、子供の地域への理解と参加意識の向上の促進に効果的なプログラムと実施方法を明確にすることを目的とする。なお、本稿では筆者が研究対象

とするまちづくり学習のプログラムの内容を整理する。

1.2. 既往研究と本研究の位置付け

「まちづくり学習」や「まち学習」、「住環境学習」等、まちづくりを教育に取り入れる試みは幅広い分野で実践的に取り組まれてきた²⁾。なかでも2002年に全面実施された「総合的な学習の時間^{注2)}」においてまちづくりが学校教育の教材として広く取り上げられることで⁴⁾、まちづくり学習の実践と研究が大きく展開することになる⁵⁾。しかしながら、学習指導要領において明確なまちづくり学習のカリキュラムは規定されておらず、地域の特色や課題を反映した多様なプログラムが、教員の創造性や工夫によって展開されている²⁾。「総合的な学習の時間」におけるまちづくり学習の具体的な内容としては、「環境」「防災」「すまい」「建築・都市計画」「景観」「観光」「福祉」「キャリア」「食農」など多岐にわたるテーマが存在し⁶⁾、これらは各地域が直面する具体的な課題に基づいている^{注3)}。

また、まちづくり学習は教育学、都市計画、建築学など多岐にわたる分野で研究されており、先行研究⁹⁾では、まちづくり学習の実施主体として学校主体と地域主体の二つのアプローチが識別されている。学校主体のアプローチでは、教育的観点から地域、行政、専門家、PTAといった多様な関係者との連携を通じて生徒に対する教育的影響を最大化することが目指されている。しかし、まちづくり学習の実施への意欲が高い教員で

* 東京大学大学院工学系研究科先端学際工学専攻
博士後期課程

** 東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻

*** 東京大学先端科学技術研究センター

**** 九州大学名誉教授

本研究では、これらの課題に対処するため、まちづくり学習を学年単位ではなく全校単位で実施する体制の構築を提案する。具体的には、地域との協働を通じたまちづくり学習を4年間にわたって継続的に実施し、単学年実施、全学年学年別実施、全学年での異学年交流実施、一部学年での異学年交流実施という4つの授業運営パターンを試行する。異学年交流を取り入れたまちづくり学習はまだ一般的ではなく、本研究はその新規性に注目し、異学年間の交流が学生間の知識と経験の共有、技術や経験の連続的な蓄積を促進し、生徒らが地域問題に対する深い理解と関与を実現することにどのように寄与するかを検証する。

この課題を克服するため、筆者は自らまちづくり学習を実施してデータを収集するアクションリサーチの方法を採用した。研究対象地域として選んだのは、世界文化遺産・高野山の名で広く知られる和歌山県高野町である。当地域は、豊富な文化資源を生かした観光産業の潜在力がありながらも、地域の若者らがその魅力や価値を十分に認識できていないという課題がある。また、高野町唯一の中学校である町立高野山中中学校ではまちづくり学習が実施されていなかったため、本研究の対象として適していると判断した。そのため筆者は高野山中中学校の学習指導員として教員と共同で2020年から2023年までの4年間にわたりまちづくり学習を実施した。本研究の分析データは2020年から2023年までに高野山中中学校に在籍した66名の生徒の学習内容とする。なお、初年度の2020年に実施したまちづくり学習の実践内容は日本建築学会技術報告集¹¹⁾で報告しているが、本稿ではその後3年間を加えた計4年間の展開をまとめて報告する(図1)。

— 24 —

された高野山金剛峯寺を擁する仏教都市である。そのため、まちなかには真言密教の根本道場である「壇上伽藍」や、空海の御廟である「奥之院」をはじめとする貴重な文化資源が豊富に存在する。2006年には世界遺産に登録され、年間120万人の観光客が世界中から訪れる観光都市でもある。しかし、ガイドブックに掲載されている一部の名所を巡る観光スタイルが目立つため、高野町は観光客に高野山の豊富な文化資源の魅力をより深く体感してもらうための「高野山デジタルミュージアム」を開設するなど、豊富な文化観光資源を活用した経済活性化を目指している。また、高野町に住む若者も高野山の価値を十分に認識できておらず、宿坊を含む地域産業に就く者が減少している。一方、高野町の暮らしに視点を移せば、東西5km、南北4kmのコンパクトなエリアに住宅、商店、学校、病院、図書館などが集約され、子どもも過ごしやすいウォーカブルな居住環境が成立している。しかし、大型量販店が無いことや、職業の選択肢が少ないことに不満を抱いて高野町を出ていく若者が多い(2023年時点の人口は2,687人)。

3. まちづくり学習の導入

3.1. まちづくり学習の導入経緯

高野山中学校では、子どもの郷土愛の育成を目的とする「ふるさと学習」が1年生を対象に「総合的な学習の時間」内で実施されていた。その授業内容は、地域にある著名な文化資源や伝統産業を調べて発表するというものであったが、2020年度に1年生の担任教員となった高野山出身の教員Aは、地域に関する情報を生徒が受け取るだけの内容に問題意識を持ち、生徒らがまちの将来のあり方を考えて地域に発信することをテーマとした学習の実施を検討する。その際、個人的に相談を受けた筆者が、コーディネーターとして教員A(担任)と教員B(副担任)とともに、地域のまちづくりへの参加意識を育てるまちづくり学習の企画・実施を担うことになった。なお、実施対象は1年生の9名である。

3.2. 2020年度の「ふるさと学習」の企画内容(図1)

高野町では『弘法大師入定1200年ご遠忌大法会』がとり行われる2034年を目処に様々なまちづくり政策が進められているのを受けて、筆者は授業テーマを「15年後の高野町がどうなっていてほしいか提言しよう」とした。授業内容は、利用者の少ない公共空間を住民や観光客に愛される居場所にするためのアイデアを考えて提案することを想定した。授業時数は計18回・29時間とし、STEP1:提言テーマの検討(5時間)、STEP2:まちなかでアイデア検討(7時間)、STEP3:まちづくり提案の作成(10時間)、STEP4:学習発表会で提言(7時間)の4段階構成とした。なお、まちづくり学習は、COVID-19の蔓延初期という社会的な不安が高まる中で

実施されたため、地域住民との接触が制限され、地域との関係構築が困難な状況であった。そのため、人的資源に直接アクセスできない中でも、地域の生きた情報にアクセス可能なプログラムの開発を検討した。

3.3. 2020年度の「ふるさと学習」の実施内容(図3)

3.3.1. STEP1: 提言テーマの検討

初回の授業では、筆者が高野山の現状と文化的景観を活かしたまちづくりの事例を紹介したあと、生徒9名が3組に分かれて「高野山のまちを良くするアイデア」を検討した。しかし、いずれのグループも具体的な都市空間に関するアイデアが出てこなかったため、2回目

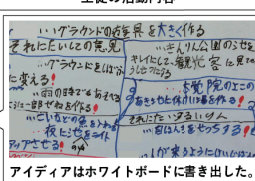
2020年度 1年生(9名) / 計18回・29時間			
STEP/日時	授業内容	生徒の活動内容	
提言テーマの検討	6/10(水) 6限目	筆者による歴史を活かしたまちづくりに関する講義&高野山のまちを良くするアイデアの書き出し@教室	 アイデアはホワイトボードに書き出した。
	6/24(水) 5・6限目	通学路にある改善すべき場所の描画と空間改善アイデアの書き出し@教室	
	7/15(水) 6限目	町長による高野町の現状に関する講義と生徒が検討したアイデアへの助言@教室	
	7/22(水) 6限目	観光客と住民が楽しめる「場づくり」のアイデアをホワイトボードに書き出し@教室	 町長が高野山の魅力と課題を生徒に説明した。
まちなかでアイデア検討	8/5(水) 4・6限目	「場づくり」アイデアのスケッチを作成(透明のアクリル板使用) @金輪公園	
	8/26(水) 5・6限目	「場づくり」アイデアのスケッチを作成(透明のアクリル板使用) @観音堂が建つ空地	
	9/16(水) 5・6限目	「場づくり」アイデアのスケッチを作成(iPad使用) @弁天公園	 アイデアを描いた透明のアクリルボードを実際の風景に重ねて写真に収める手法や、iPadで撮影した写真にタッチペンでアイデアを描き込む手法で、54枚のスケッチを描いた。
	10/7(水) 5・6限目	金輪公園・観音堂・弁天公園の空間改善アイデアのバース作成① @教室	
まちづくり提案の作成	10/14(水) 6限目	金輪公園・観音堂・弁天公園の空間改善アイデアのバース作成② @教室	
	10/21(水) 6限目	金輪公園・観音堂・弁天公園の空間改善アイデアの発表原稿作成① @PC教室	
	10/28(水) 6限目	金輪公園・観音堂・弁天公園の空間改善アイデアの発表原稿作成② @PC教室	 iPad上でスケッチを描きながら、金輪公園・弁天公園・観音堂の具体的な空間利活用のアイデアを検討した。
	11/4(水) 5・6限目	まち全体を歩いて巡るアイデアの検討(A3マップにアイデア出し) @PC教室	
	11/9(月) 6限目	まち全体を歩いて巡るアイデアの構想図作成(A1版地図に書き込み) @PC教室	
	11/11(水) 5・6限目	まち全体を歩いて巡るアイデアの発表原稿作成 @PC教室	 観光客に3つの公共空間を拠点にまち全域を巡ってもらうためのアイデアとして、社寺や商店を巡るスタンプラリーを企画し、ルートマップを作成した。
	11/16(月) 6限目	友好都市・香川県普通寺市の中学生に向けてまちづくり提案を発表 @教室(ZOOMにて)	
	11/17(火) 5・6限目	中学校内で開催される学習発表会の提案発表のリハーサル @体育館	
	11/20(金) 5・6限目	中学校内で開催される学習発表会でまちづくり提案を発表 @体育館(プロジェクトにて)	 まちづくり提案を学習発表会で他学年の生徒と保護者に向けて発表した。
	12/9(水) 5・6限目	“ふるさとわかやま学習賞”提出用のまちづくり提案動画を撮影 @教室	

図3 2020年度の「ふるさと学習」の実施内容

の授業では生徒の通学路にある「良くなって欲しい場所」の絵を描き、「そこで住民や観光客が楽しめるようにするための空間的な工夫を考える」という手順を踏んだ。さらに、3回目の授業では、教員Aの友人でもある町長が高野山の魅力と課題を生徒に説明する講義を設け、生徒が検討しているアイデアに対して町長から助言を受けた。この授業で、生徒らは観光客の訪問先が著名な観光名所に偏っており、まち全体を歩く人が少ないという課題を認識した。4回目の授業では、金輪公園、弁天公園、観音堂が建つ空地、公民館など利用者の少ない公共空間を人々に愛される居場所にするための空間改善のアイデアをホワイトボードに書き出した。

3.3.2. STEP2: まちなかでアイデア検討

生徒が考えた空間改善のアイデアに具体性を持たせるため、金輪公園、弁天公園、観音堂が建つ空地において、生徒がスケッチ表現により空間改善のアイデアを検討する100分間×3回のフィールドワークを実施した。生徒らは、筆者から対象地の歴史的背景に関する説明を受けたあと、アイデアを描いた透明のアクリルボードを実際の風景に重ねて写真に収める手法や、iPadで撮影した写真にタッチペンでアイデアを描き込む手法で、計54枚のアイデアスケッチを描いた。このフィールドワーク手法は、COVID-19の蔓延により地域住民との直接的な接触が制限されている中でも、生徒が地域の実情に基づいたアイデアを検討できるように筆者が開発したものである。生徒らが検討したアイデアの内容は、観光客に寺社仏閣（金輪塔・祓川弁天社・観音堂）へ訪れてもらうための参道、案内板、屋根付きベンチの整備や、一定時間滞在してもらうための屋台、土産物店の設置などである。

3.3.3. STEP3: まちづくり提案の作成

生徒らは、STEP2で描いた54枚のアイデアスケッチを参照しながら、金輪公園、弁天公園、観音堂が建つ空地における空間改善の提案内容をブラッシュアップし、iPad上で提案スケッチを描いた。その後、教員Aが生徒らに対しまち全体に視野を広げ面的なアイデアに発展させるように助言を与えたため、生徒らは観光客に3つの公共空間を拠点にまち全域を巡ってもらうためのアイデアとして、社寺や商店を巡るスタンプラリーを企画し、ルートマップを作成した。

3.3.4. STEP4: 学習発表会で提言

生徒らがSTEP3で作成したまちづくり提案を学習発表会で他学年の生徒と保護者に向けて発表した。さらに、COVID-19の感染拡大の状況下でも生徒らが他者に対して自分たちの提案を発表する機会を確保するため、友好都市・香川県善通寺市の中学生とのオンライン交流会において発表を行った。

4. 地域との繋がりを強化するプログラムの企画・実施

4.1. 2021年度の「ふるさと学習」の企画内容（図1）

高野町教育委員会・指導主事の提案により「ふるさと学習」の対象を全学年（34名）に広げた。1年生（10名）の授業テーマは「高野町の魅力・課題を見つけてまちの未来を話し合おう」とし、生徒が地域住民との対話を通じて高野山を訪れたい・歩きたい・住みたい・まちにするアイデアを考えて提案することを想定した。授業時数は計19回・37時間とし、STEP1:地域マップ作成を通じた地域資産の把握（7時間）、STEP2:タウンウォッチングによる地域課題の特定（8時間）、STEP3:役場職員とまちづくり政策の立案（10時間）、STEP4:タウンミーティングにて町長へ政策提言（10時間）の4段構成とした。2年生（10名）の授業テーマは「高野町の伝統産業の未来を考えよう」とし、生徒が職業体験に取り組んだあと、伝統工芸を活用した新しいプロダクトを考えて提案する内容を想定した。授業時数は計6回・10時間とし、STEP1:地域の職業調査（6時間）、STEP2:地域の職業体験（2時間）、STEP3:アイデアの検討（1時間）、STEP4:アイデアの共有（1時間）の4段構成とした。なお、具体的な授業内容は教員A（担任）が計画し、筆者と教員B（副担任）が実施を支援した。3年生（14名）の授業テーマは「高野町のまちの未来構想を町長に提言しよう」とし、中学2年間で学んだ地域に関する情報を基盤にまちづくり提案を考えて町長に提言する内容を想定した。授業時数は計10回・17時間とし、STEP1:提言テーマ検討（3時間）、STEP2:提言の検討・提言書の作成（10時間）、STEP3:役場にて町長へ提言（4時間）の3段構成とした。

4.2. 2021年度1年生の「ふるさと学習」の実施内容（図4）

4.2.1. STEP1: 地域マップ作成を通じた地域資産の把握

1回目の授業では、まちづくり学習に取り組む意義を生徒に共有するため、筆者が高野町の人口減少の実態と人口減少地域のまちづくり事例を紹介した。続く2回目の授業では、生徒ら10名が各々に高野山のイメージマップを描き、マップ上に「魅力と課題」を書き込んで共有した。生徒らが描いたイメージマップの内容は、自宅から中学校までの通学範囲を中心に金剛峯寺や壇上伽藍、奥之院、コンビニなどを描くものが多く、生徒らから「どこに何があるのか案外思い出せず書くのが難しい」という声が挙がったため、3・4回目の授業ではGoogleマップを参照して高野山のその他の都市空間の情報を書き足し、その中で気になった場所に関する情報をインターネットや書籍を用いて調べる手順を踏んだ。5回目の授業では、生徒ら10名が「訪れたいと思えるまちづくり」「歩くのが楽しいまちづくり」「住みたいと思えるまちづくり」の3テーマに分かれ、グループで「高野山のまちをどうしていきたいか？」を議論した。

2021年度 1年生(10名) / 計19回・37時間(*国語科での実施時間を除く)			2021年度 2年生(10名) / 計6回・10時間(*職場体験学習を除く)		
STEP/日時	授業内容	生徒の活動内容	STEP/日時	授業内容	生徒の活動内容
地域マップ作成を通して地域資産の把握	5/13(木) 6限目	筆者による高野町の人口動態の解説 & まちづくりの重要性に関する講義 @教室	5/13(木) 5・6限目	高野町の職業内訳の調査 @教室	
	5/19(水) 5・6限目	高野山のイメージマップを作成 & 生徒の好きな場所や課題の書き出し @教室	6/2(水) 2・3限目	筆者による高野町の職業の紹介 & 就業人口を増やす自治体の事例紹介 @教室	
	5/20(木) 5・6限目	Google Mapsを用いてイメージマップに書いていなかった情報を加筆 @教室	7/1(木) 5・6限目	高野山の就業人口を増やすための新しい職業のアイデアを検討 @教室	高野町にて就業者の多い職業や少ない職業を調べた上で、今後どのような仕事があれば良いか?を検討した。
	5/26(水) 5・6限目	気になった場所をインターネットや書籍で調べる(担任が国語科で実施) @図書室	7/14(水) 5・6限目	伝統産業の職業体験(数珠づくり) @教室	
タウンウォッチングによる地域課題の特定	6/10(木) 5・6限目	3テーマに分かれて、高野山のまちをどうしていきたいかを議論 @教室	11/1(月) 5・6限目	職業体験学習(実習) @精肉店、胡麻豆腐店、飲食店、土産物店、郵便局、消防署、こども園、車整備工場	
	7/8(木) 5・6限目	タウンウォッチングの訪問場所検討 & 訪問希望先への電話依頼 @家庭科教室	11/2(火) 5・6限目	職業体験学習(実習) @精肉店、胡麻豆腐店、飲食店、土産物店、郵便局、消防署、こども園、車整備工場	
	7/12(月) 4限目	インタビューの練習 (担任が国語科で実施) @教室	11/3(水) 5・6限目	職業体験学習(実習) @精肉店、胡麻豆腐店、飲食店、土産物店、郵便局、消防署、こども園、車整備工場	数珠作りの体験学習に取り組んだ。
	7/14(水) 5・6限目	地域住民へのインタビュー @金剛峯寺・女人堂・徳川家霊台・金輪塔・高野山大学図書館・交番・書店・和菓子屋・履物屋	11/10(水) 5・6限目	職業体験学習 (実習の報告書作成) @PC教室	
役場職員とまちづくり政策の立案	9/8(水) 5・6限目	タウンウォッチングの訪問場所検討 & 訪問希望先への電話依頼 @家庭科教室	11/17(水) 5・6限目	職業体験学習 (高野山の仕事の魅力と課題を考察) @PC教室	
	9/15(水) 5・6限目	地域住民へのインタビュー @霊宝館・観光情報センター・藏川井天社・土産物店・ゲストハウス	11/22(月) 5・6限目	中学校内で開催される学習発表会で職業体験学習の内容を発表 @体育館(プロジェクトにて)	
	9/16(木) 5・6限目	地域住民へのインタビュー @森林「ゲンジの森」	12/8(水) 5限目	伝統産業の継承方法を検討 @教室	
	9/22(水) 5・6限目	3テーマのグループ毎に、高野山のまちをどうしていきたいかを議論 @家庭科教室	12/8(水) 6限目	学級内でアイデアを共有 @教室	総合学習の時間に実施されている職場体験学習をまちづくり学習のフィールドワークの一環として位置付け、そこの学習も含めて伝統産業の継承方法を検討した。
タウンウォッチングによる地域課題の特定	9/23(木) 4限目	ディスカッションの練習 (担任が国語科で実施) @教室	2021年度 3年生(14名) / 計10回・17時間		
	9/29(水) 5・6限目	役場職員とまちづくりアイデアを議論しA1ポスターにまとめて発表 @家庭科教室	STEP/日時	授業内容	生徒の活動内容
	10/7(木) 5・6限目	役場職員と検討したまちづくりのアイデアをもとに提言ポスターを作成 @PC教室	5/13(木) 6限目	筆者による導入講義&SWOT分析を通じて高野町の強みと課題の洗い出し @教室	
	10/14(木) 5・6限目	まち全体の構想作り②(A1模造紙に書き込み) @家庭科教室	6/3(木) 5・6限目	中学2年間の学習内容をもとにまちづくりの提言テーマを議論 @教室	タブレットに書き出して共有した。
タウンミーティングにて町長へ政策提言	10/20(水) 5・6限目	発表用資料づくり (発表原稿) @PC教室	9/15(水) 5・6限目	5グループに分かれて議論し、アイデアをブラッシュアップ @教室	
	10/21(木) 4限目	プレゼンテーションの練習 (担任が国語科で実施) @教室	9/16(木) 5・6限目	まちづくりアイデアの提言書を作成 @PC教室	
	10/27(水) 5・6限目	役場主催のタウンミーティングに参加してまちづくりアイデアを提言 @高野町中央公民館	9/22(水) 5・6限目	まちづくりアイデアの提言書を作成 @教室	
	11/4(木) 5・6限目	タウンミーティングでの町長の助言をもとにアイデアを修正 @PC教室	9/24(金) 5・6限目	プレゼンテーション資料(PPT/模型)を作成 @教室	グループごとに提言書を作成し、提案内容を分かりやすく伝えるための模型を作成した。
タウンミーティングにて町長へ政策提言	11/18(木) 5・6限目	中学校内で開催される学習発表会の発表リハーサル @体育館	10/20(水) 5・6限目	プレゼンテーション資料(PPT/模型)を作成 @教室	
	11/22(月) 5・6限目	中学校内で開催される学習発表会でアイデアを発表 @体育館(プロジェクトにて)	10/21(木) 6限目	役場に訪問してまちづくりアイデアを町長に提言 @高野町役場	
	12/2(木) 5・6限目	“ふるさとわかやま学習大賞”提出用のA1模造紙を作成 @PC教室	11/18(木) 6限目	中学校内で開催される学習発表会の発表リハーサル @体育館	
			11/22(月) 5・6限目	中学校内で開催される学習発表会で提言書の内容を発表 @体育館(プロジェクトにて)	5つアイデア(①空き家をリノベーション、②児童公園のリノベーション、③新しい観光ビジネスを創出、④観光インフラを改善、⑤高野山周辺の山村集落の活性化)を提言した。

図4 2021年度の「ふるさと学習」の実施内容

4.2.2. STEP2: タウンウォッチングによる地域課題の特定

続いて、地域住民が考える「高野山の魅力と課題」、「高野山のまちをどうしていきたいか?」を把握するために、生徒らは100分間×3回にわたるタウンウォッチングに取り組んだ。その内容は、生徒が選定した6ヶ所の対象地（金剛峯寺・土産物店「報徳堂」・田原屋履物店・和菓子屋「麩善」・女人堂・祓川弁天社）と、STEP1で生徒が描いたイメージマップの内容をもとに筆者が候補地を提案し、生徒が選定した9ヶ所の対象地（霊宝館・高野山観光情報センター・書店「小堀南岳堂」・徳川家霊台・金輪塔・高野山大学図書館・ゲストハウス「kokuu」・高野幹部交番・森林「ゲンジの森」）において、地域住民にインタビューを実施するものである。調査に先立ち生徒らは、教員C(担任)から国語科の授業でインタビューの実施方法について助言を受け、地域住民に自らアポイントメントをとっている。なお、タウンウォッチングは現地を歩きながらそのまちの魅力や課題を発見する一般的な方法である。

4.2.3. STEP3: 役場職員とまちづくり政策の立案

生徒らはタウンウォッチングで収集した情報をもとに「高野山を訪れたくなる・歩きたくなる・住みたくなる」アイディアを検討するグループワークに取り組んだ。グループワークでは、高野町企画課職員の提案を受けて、各グループに役場職員1名が加わってまちづくり提案を議論する100分間のワークショップも設けた。役場職員の助言を受けて、生徒らは高野山の鳥瞰地図に付箋を貼って地域課題を整理し、自らのアイディアが地域に及ぼすメリットとデメリットを検討しながら提案をまとめた。生徒らが検討したアイディアの内容は、「高野山の自然を楽しめるキャンプサイトの整備」や「まち歩きスタンプラリーの実施」、「空き家再生による住宅ストックの確保」、「人気カフェチェーンの誘致」などである。

4.2.4. STEP4: タウンミーティングにて町長へ政策提言

高野町企画課職員の提案を受けて、生徒らは高野町のタウンミーティングに参加し、町長に向けてまちづくり提案を発表した。それに対し、町長は「まち歩きスタンプラリーの実施」を高く評価した一方で、「キャンプサイトの整備」や「空き家再生による住宅ストックの確保」、「人気カフェチェーンの誘致」の提案には難色を示し、「宗教をはじめとする高野山にしかない資産を最大限に活かす提案をしてほしい」と生徒に助言した。町長からの助言を受けて、生徒らは自主的に提案を修正し、改めて学習発表会で他学年の生徒や保護者、タウンウォッチングの協力者に向けて発表した。

4.3. 2021年度2年生の「ふるさと学習」の実施内容(図4)

STEP1: 地域の職業調査では、生徒らは高野町の職業内訳を調べた上で、今後どのような仕事があれば良いかを検討した。続くSTEP2: 地域の職業体験では、数珠作

りを体験した。また、総合的な学習の時間に実施した「職場体験学習」での学びも含めて、STEP3: アイディアの検討にて伝統産業の継承方法を検討した。STEP4: アイディアの共有は、学級内で実施した。

4.4. 2021年度3年生の「ふるさと学習」の実施内容(図4)

STEP1: 提言テーマ検討では、生徒らはSWOT分析を用いて高野町の強みや課題を書き出した上で提言したいテーマを検討した。その際、生徒らは1年時の「ふるさと学習」や2年時の「職場体験」で得た知識を参照した。続いて、STEP2: 提言の検討・提言書の作成では、提言テーマが類似する生徒同士でグループを組み、5つのグループ(4名,4名,3名,1名,1名)に分かれて具体的な提言内容を検討し、提言書や提案模型を作成した。生徒らが検討したアイディアの内容は、「空き家をリノベーションした新しい居住空間の創出」、「児童公園を活用した癒しの場づくり」、「高野山の観光資源を活用した新たな観光ビジネスの創出」、「観光客の満足度を高めるためのインフラ改善」、「高野山周辺の山村集落の活性化」である。STEP3: 役場にて町長へ提言では、生徒らは高野町役場に訪問し、提言書を町長に手渡した。さらに、学習発表会で他学年の生徒や保護者に向けて発表した。

5. プレイス・メイキング型プログラムの企画・実施

5.1. 2022年度の「ふるさと学習」の企画内容(図1)

生徒の地域づくりへの当事者意識を高めるために、コミュニティ主導で市民の場所への愛着を育むアプローチとして有効とされるプレイス・メイキングの手法を参照し^{注5)}、多様なまちのステークホルダーとの交流を通じて具体的な場づくりの提案・実践に取り組むまちづくり学習を企画した。同時に、異学年間の交流に関する先行研究の成果を参照し、本研究の枠組みに取り入れることとした。先行研究¹³⁾において、異なる学年間での交流は学生同士の知識と経験の共有を促進し、技術や経験の連続的な蓄積を生み出す効果が明らかにされている。特に、3学年間の交流は上級生が中級生を介して下級生に知識や経験を伝える構造が容易に形成され、これにより同学年集団と比較して意見や経験の交換がより活発に行われることが示唆されている。筆者はこれらの知見を基に、プレイス・メイキングの枠組み内での異学年間交流活動を組み合わせた学習プログラムを提案した。具体的な授業内容として、授業テーマを「高野山の人・もの・空間を活かしたまちの居場所をつくろう」とし、生徒が僧侶や伝統産業に従事する職人、観光業に携わる個人経営者や企業職員、公務員といったまちのステークホルダーの話を聞いて高野山の魅力と課題を整理し、異学年交流グループで具体性の高い居場所づくりの提案を考えて実践するという内容を想定した。授業時数は計24回・42時間とし、STEP1: 地域資源のデスクリ

サーチ（17 時間），STEP2：地域ステークホルダーとの交流（16 時間），STEP3：地域課題の特定・プレイスビジョンの立案（6 時間），STEP4：プレイスビジョンの提言・短期的な実験（4 時間）の 4 段階構成とした。STEP1, 2 は学年別活動（1 年生 9 名，2 年生 10 名，3 年生 10 名）で，STEP3, 4 は異学年交流活動（全学年 29 名）である。なお，授業構成は，Project for Public Spaces が提唱する“The Placemaking Process”¹⁴⁾を参照しながら検討し，具体的な授業内容は各学年の教員と議論して計画した。

5.2. 2022 年度の「ふるさと学習」の実施内容（図 5）

5.2.1. STEP1：地域資源のデスクリサーチ

前年度の STEP1 ではイメージマップづくりに取り組み，生徒の都市空間に関する認知は広がったが，書き出せるまちのコンテンツが空間に紐づけられるものに限られた。そのため，2022 年度は，全学年の生徒が各々で都市空間に限らず思いつく地域の物事を書き出すマインドマップづくりに取り組んだ。マインドマップの構成は，「歴史」・「文化」・「職業」・「暮らし」と 2 つ空白項目の先を自由に書き足すというものである。生徒らが描いたマインドマップの内容は，「歴史」では空海や三鈷の松，「文化」ではろうそく祭りや青葉祭り，「職業」では金剛峯寺やお寺，コンビニエンスストア，「暮らし」では買い物の不便さや，交通の不便さに関するワードが目立った。また，空白項目には「食」や「自然」と書き込む生徒が多数を占めた。マインドマップづくりを経て，生徒の高野山の地場産業に関する認知が非常に低いことが分かったため，ふるさと読本「わたしたちの高野町」を用いて地域の仕事に関する情報を収集する手順を踏んだ。

5.2.2. STEP2：地域ステークホルダーとの交流

まず初めに生徒らは全学年合同で金剛峯寺の僧侶から高野山の歴史や空海の人生，高野山が大切にしている考え方などを学び，その後，学年別で住民によるフィールドレクチャー（各回 100 分間）を受講した。フィールドレクチャーのプログラムは筆者と教員 C（2 年生担任），教員 D（3 年生担任），教員 E（1 年生副担任）が計画した。1 年生は寺社建築，檜皮葺，表具，和菓子，精進料理などの伝統産業に従事する職人を訪問し，職人らにより企画された体験活動を通じて仕事の方法や哲学を学んだ（全 5 回）。2 年生は，新規事業に挑戦する胡麻豆腐店やゲストハウスの経営者，高野紙の再興に奮闘するデザイナーと紙漉き職人，高野山麓の集落活性化に力を注いでいる鉄道会社社員らから，伝統産業を未来につなげるための価値創出方法について学んだ（全 4 回）。3 年生は，役場や DMC の職員からまちづくりのアイデアの具現化方法を学んだ（全 2 回）。フィールドレクチャーの受講後に，生徒らは学習内容を A1 サイズのポスターに整理し，全学年の生徒間で共有した。

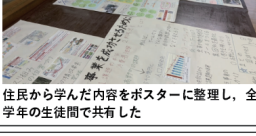
2022 年度 1 年生(9 名)・2 年生(10 名)・3 年生(10 名) / 計 24 回・42 時間		
STEP/日時	授業内容	生徒の活動内容
地域資源のデスクリサーチ	6/1(水) 5・6 限目 マインドマップづくり・共有 (学年別で実施) @教室	 歴史・文化・職業・暮らしの項目から，その先を自由に書き足すというものである。
	6/2(水) 6 限目 教員によるオリエンテーション & 探求テーマの検討(異学年交流で実施) @家庭科教室	
	6/8(水) 6 限目 住民によるレクチャー @金剛峯寺(異学年交流で実施)	 全学年で僧侶から高野山の歴史や空海の人生高野山が大切にしている考え方などを学んだ。
	6/15(水) 6 限目 住民によるレクチャー @大工「尾上組」(1 年生) @教育委員会(3 年生)	 1 年生は，伝統産業の職人から仕事の方法や哲学を学んだ。
地域ステークホルダーとの交流	6/17(水) 5・6 限目 住民によるレクチャー @胡麻豆腐店「角濱」(2 年生)	 2 年生は，新規事業に挑戦する経営者や職人から伝統産業を未来に繋げる方法を学んだ。
	6/22(水) 5・6 限目 住民によるレクチャー @検査職人「古家」(1 年生) @細川紙「和紙の会+koubou2466」(2 年生)	 3 年生は，役場や DMC の職員からまちづくりのアイデアの具現化方法を学んだ。
	6/23(木) 6 限目 住民によるレクチャー @表具店「大西龍志堂」(1 年生)	
	6/28(水) 5・6 限目 住民によるレクチャー @和菓子店「さざ波」(1 年生) @南海電鉄沿線価値創造課(2 年生) @DMC 高野山(3 年生)	 住民から学んだ内容をポスターに整理し，全学年の生徒間で共有した。
地域課題の特定・プレイスビジョンの立案	6/29(木) 5・6 限目 住民によるレクチャー @精進料理店「花菱」(1 年生) @ゲストハウス「kokuu」(2 年生)	 全学年の生徒で構成する 3 グループでまちづくりのアイデアを検討した。
	7/6(水) 5・6 限目 インタビュー内容を整理して ポスターにまとめる(学年別で実施) @教室	
	7/7(木) 5・6 限目 プレゼンテーションの練習 (国語科にて実施) @家庭科教室	
	7/8(金) 5・6 限目 インタビュー内容を全学年で共有 (異学年交流で実施) @家庭科教室	
プレイスビジョンの提言・短期的な実験	7/13(水) 6 限目 教員が創作活動の方法を説明 (異学年交流で実施) @家庭科教室	
	8/31(水) 5・6 限目 異学年交流グループに分かれて ブレインストーミング @家庭科教室 / 図書室 / 教室	
	9/30(金) 5・6 限目 まちづくり提案のテーマを 議論して決定 @家庭科教室 / 図書室 / 教室	
	10/5(水) 5・6 限目 まちづくり提案の具体的な内容を 議論 @家庭科教室 / 図書室 / 教室	
プレイスビジョンの提言・短期的な実験	10/12(水) 5・6 限目 まちづくり提案の具体的な内容を 議論 & 模型や実物大サンプルの制作 @家庭科教室 / 図書室 / 教室	
	10/13(木) 5・6 限目 まちづくり提案の具体的な内容を 議論 & 模型や実物大サンプルの制作 @家庭科教室 / 図書室 / 教室	
	10/19(水) 5・6 限目 まちづくり提案の具体的な内容を 議論 & 模型や実物大サンプルの制作 @家庭科教室 / 図書室 / 教室	
	10/26(水) 5・6 限目 まちづくり提案の発表ポスター & 発表原稿の作成 @家庭科教室 / 図書室 / 教室	
プレイスビジョンの提言・短期的な実験	12/9(金) 6 限目 まちづくり提案の発表ポスター & 発表原稿の作成 @家庭科教室 / 図書室 / 教室	
	12/15(木) 5・6 限目 金剛峯寺でのポスターセッションの 発表リハーサル(異学年交流で実施) @体育館	 ポスターセッション形式で学習成果を発表し 小学生や商店主，町長らと意見交換した。
	12/19(月) 5・6 限目 金剛峯寺でのポスターセッションで アイデアを発表(異学年交流で実施) @金剛峯寺新別殿	
	12/21(水) 5・6 限目 「ふるさとわかやま学習大賞」提出用 の A1 模造紙を作成(異学年交流で実施) @家庭科教室	

図 5 2022 年度の「ふるさと学習」の実施内容

5.2.3. STEP3: 地域課題の特定・プレイスビジョンの立案

異学年の生徒を組み合わせた1組10名の3グループをつくり、生徒らはグループごとにまちづくり提案を検討した。アイディアの具体性を高めるため、模型や実寸大のサンプルを製作しながら議論し、最終的な提案はA1サイズのポスターにまとめた。グループ1の生徒らは、3年生の生徒が1年生の時に提案した「弁天公園の空間改善」を発展させる形で「弁天公園でのフードトラックによる和菓子スイーツの販売と休憩所の整備」を企画した。他方、グループ2の生徒らは、2,3年生の生徒が各々1年生の時に提案した「スタンプラリー」のアイディアを発展させる形で「高野山のマイナースポットを巡るスタンプラリー」を企画し、地域の土工職人の支援を受けてスタンプラリーキットを作成した。また、グループ3の生徒らは、3年生の生徒が1年生の時に提案した「金輪公園の空間改善」と、2年生の生徒が1年生の時に考えた「人気カフェの誘致」のアイディアを発展させる形で「金輪公園でのカフェづくり」を企画した。具体的には、1年生の生徒が精進料理を生かしたランチボックスやドリンクを、2,3年生の女子生徒が公園の空間改善を検討し、各々提案模型を作成した。また、2,3年生の男子生徒は地域の紙漉き職人の支援を受けてカフェのポイントカードを作成した。

5.2.4. STEP4: プレイスビジョンの提言・短期的な実験

前年度のSTEP4では、生徒らがタウンミーティングに参加して町長にまちづくり提案を発表したが、タウンミーティングに参加していた住民は2名に留まり、幅広い視点からフィードバックを得ることができなかった。そのため筆者は人が集まりやすい場所でポスターセッション形式の意見交換会を実施することを企画し、金剛峯寺の僧侶の提案を受けて金剛峯寺新別殿で開催した。生徒らは保護者や小学生、商店主、町長、自治体職員、まちづくりに関心のある住民ら総勢約60名と議論し、そのうちグループ2の生徒らが提案した「高野山のマイナースポットを巡るスタンプラリー」に対しては、町長から社会実装の提案を受けたが、短期的な実験の実施には至らず、ポスターセッション終了後に、生徒らが制作したスタンプラリーキットを高野町観光情報センターにて3ヶ月間展示した。また、グループ1の生徒らが提案した「弁天公園でのフードトラックによる和菓子スイーツの販売」や、グループ3の生徒らが提案した「金輪公園でのカフェづくり」に対しては、胡麻豆腐店主から「胡麻豆腐を使ったスイーツの共同開発に取り組まないか」というアイディアが持ちかけられた。

6. タクティカル・アーバニズム型プログラムの企画・実施

6.1. 2023年度の「ふるさと学習」の企画内容(図1)

生徒の地域づくりへの当事者意識と実践スキルを高め

るために、短期的な社会実験などの小さなアクションから始めてまちの長期的変化へつなげる「タクティカル・アーバニズム」の手法を参照し^{注6)}、地域住民と連携した社会実験プロジェクトをメインプログラムに据えた実践的なまちづくり学習を企画した。また、前年に引き続き異学年交流グループでの実施を前提としたが、1年生に対して探求学習の方法を丁寧に指導する必要があると判断したため1年生のみ単学年での実施とした。

1年生(21名)の授業テーマは「高野山をより一層深く味わうための謎解きガイドブックをつくろう」とし、生徒が町長や役場職員の支援を受けて謎解きガイドブックを制作・配布する社会実験に取り組み、実験結果をもとに観光まちづくり政策を考えて発信することを想定した。授業時数は計22回・42時間とし、STEP1: 観光客への街頭インタビュー(3時間)、STEP2: 社会実験プロジェクトの計画・実行(26時間)、STEP3: 社会実験の検証・まちづくり政策の立案(8時間)、STEP4: まちづくり政策の提言・意見交換(5時間)の4段構成とした。授業の担当者は、前年度のまちづくり学習で「高野山のマイナースポットを巡るスタンプラリー」の提案作成を指導した教員Eとした。

2,3年生(21名)の授業テーマは「高野山の奥深い魅力を世界の人々に伝えるフードをつくろう」とし、生徒が胡麻豆腐店主の支援を受けて胡麻豆腐スイーツを開発・販売する社会実験に取り組み、実験結果をもとに地域産業の活性化案を考えて発信することを想定した。授業時数は計23回・50時間とし、STEP1: 観光客への街頭インタビュー(3時間)、STEP2: 社会実験プロジェクトの計画と実行(36時間)、STEP3: 社会実験の検証・まちづくり政策の立案(6時間)、STEP4: まちづくり政策の提言・意見交換(5時間)の4段構成とした。授業の担当者は、2020年度からまちづくり学習の実施に携わっている新卒4年目の教員Bとした。なお、本年度のまちづくり学習は実施途中である。

6.2. 2023年度の「ふるさと学習」の実施内容(図6)

6.2.1. STEP1: 観光客への街頭インタビュー

前年度までのSTEP1では、イメージマップづくりやマインドマップづくりを通じて生徒の都市認識を広げる手法を取っていた。しかし「高野町外の人が高野山をどう認識しているか?」を学ぶ経験も必要だと移住者から提案があり、高野山が客観的にどう捉えられているのかを知るために観光客へのインタビューに取り組んだ。なお、教員Bの提案で全学年交流活動とし、42名を7人1組の6グループに分けて実施した。

1年生の生徒らは授業テーマ「高野山をより一層深く味わうための謎解きガイドブックをつくろう」を受けて、「高野山に来た理由や目的」、「来訪回数」、「行きたいところ」、「どこからどうやって来たか」、「高野山に抱いて

2023年度 1年生(21名) / 計22回・42時間			2023年度 2・3年生(21名) / 計23回・50時間		
STEP/日時	授業内容	生徒の活動内容	STEP/日時	授業内容	生徒の活動内容
観光客への街頭インタビュー	5/11(木) 6限目 学習テーマ発表&ガイダンス 観光客インタビュー内容の検討 @教室	 国内外観光客に、高野山に来た理由や来訪回数、良かったところなどを聞いた。	5/11(木) 6限目 学習テーマ発表&ガイダンス 観光客インタビュー内容の検討 @教室	 国内外観光客に、高野山にあったらいいなと思う食べ物などを聞いた。	
	5/17(水) 5-6限目 謎解きガイド製作のための情報収集 観光客インタビュー @まちなか(3人×7チーム)	 高野町長から高野山の観光まちづくりに関する講義を受けた。	5/17(水) 5-6限目 フード開発のための情報収集 観光客インタビュー @まちなか(3-4人×6チーム)	 胡麻豆腐店主から高野山の歴史・文化と新たな発想を掛け合わせたものづくりの方法と心得に関する講義を受けた。	
	6/13(火) 5-6限目 町長による観光まちづくりの講義&役場職員とガイドブックのテーマ検討 @教室	 5人1組の4グループに分かれて役場職員と共に謎解きガイドブックのテーマを検討した。	6/13(火) 5-6限目 胡麻豆腐店主によるフード開発の講義 &高野山フードのコンセプト検討 @家庭科室	 5人1組の4グループに分かれて新たに開発する高野山フードの商品アイデアを検討した。	
	6/20(火) 5-6限目 謎解きガイドのアイデア検討1 (謎解きコンテンツの検討) @教室	 コンテンツを具体化させるための情報収集として、金剛峯寺の職員へ取材した。	6/20(火) 5-6限目 高野山フードのアイデアを検討し 商品企画をロイロノートにまとめる @教室	 製品化する高野山フードのアイデアを2組選定するためのコンペティションを開催した。	
	6/29(木) 5-6限目 謎解きガイド製作のための地域資産を深掘りするための取材 @金剛峯寺	 取材で収集した情報をもとにガイドブックのコンテンツ・構成を検討した。	6/29(木) 6限目 商品化案の検討(自己評価) @教室	 「胡麻豆腐パフェ」と「胡麻豆腐だんご」の商品化を決定し、10人1組の2グループに再編した。	
	7/6(木) 5-6限目 謎解きガイドのアイデア検討2 (モックアップの作成) @教室	 製品化するガイドブックのアイデアを2組選定するためのコンペティションを開催した。	7/6(木) 5-6限目 商品化案の検討(コンペ形式) 商品化案のブラッシュアップ1 @教室	 胡麻豆腐店主の協力のもと試作品を作った。	
	7/11(火) 5-6限目 実作化案の選定(コンペ形式) 実作化案のブラッシュアップ1 @教室	 2案のガイドブックのタイトルを検討し、美術科教員の協力のもと、ガイドブックの制作に取り組んだ。	7/11(火) 5-6限目 商品企画書(A3用紙)を作成 @教室	 試作品は評価内容を分析して商品案を微修正し、販売価格を確定した。	
	7/18(火) 5-6限目 実作化案のブラッシュアップ2 (コンテンツの作り込み) @教室	 2案のガイドブックのタイトルを検討し、美術科教員の協力のもと、ガイドブックの制作に取り組んだ。	7/18(火) 5-6限目 商品企画書を胡麻豆腐店主に提出 @家庭科室	 評価内容を分析して商品案を微修正し、販売価格を確定した。	
	7/19(水) 5-6限目 謎解きガイドブックの誌面作成 @教室	 完成した謎解きガイドブックは11月上旬に街頭で観光客に配布し、内容を評価してもらった。	8/30(水) 4-6限目 試作 @角濱胡麻豆腐店	 販売促進ツールを検討・作成した。完成した高野山フードは11月に街頭で観光客に販売し、内容を評価してもらった。橋本市で開催された「まっせ・はしもと」にも出店した。	
	8/30(水) 1限目 謎解きガイドブックの誌面作成 @教室		8/31(木) 5-6限目 試食調査 @角濱胡麻豆腐店		
	9/25(月) 6限目 謎解きガイドブックの誌面作成 @教室		9/5(火) 3-4限目 試食調査結果の分析 商品化案のブラッシュアップ3 @教室		
	10/3(火) 5-6限目 謎解きガイドブックの制作 @図書室		9/20(水) 5-6限目 レシピの確定 @教室		
	10/11(水) 5-6限目 謎解きガイドブックの制作 (美術科にて実施) @美術室		10/3(火) 2-3限目 販売準備 @教室		
	10/18(水) 5-6限目 謎解きガイドブックの制作 (美術科にて実施) @図書室		10/11(水) 6限目 販売促進ツールの制作 @教室		
11/1(水) 5-6限目 謎解きガイドブックの制作 @図書室		10/18(水) 6限目 販売促進ツールの制作 @教室			
社会実験の検証・まちづくり政策の立案	11/7(火) 2-3限目 ガイドブック配布&アンケート収集 @まちなか		11/16(木) 4-6限目 商品製造 @角濱胡麻豆腐店		
	11/9(火) 5-6限目 活動の流れを整理 (整理・考察・まちづくり構想) @教室		11/17(金) 4-6限目 販売&アンケート収集 @角濱胡麻豆腐店(大門・小田原)		
	11/10(木) 5-6限目 活動の流れを整理 (整理・考察・まちづくり構想) @教室		11/18(土) 1-6限目 販売&アンケート収集 @橋本市主催「まっせ橋本-柿まつり」		
	11/16(木) 5-6限目 活動報告プレゼン資料作成 @教室		11/21(火) 5-6限目 活動報告プレゼン資料作成 (整理・考察・産業活性化の政策構想) @教室		
	11/17(金) 5-6限目 活動報告プレゼン資料読み合わせ @教室		11/29(水) 5-6限目 活動報告プレゼン資料作成 (整理・考察・産業活性化の政策構想) @教室		
	11/18(土) 1-6限目 ガイドブックの展示・配布 (2,3年生の活動に同行) @橋本市主催「まっせ橋本-柿まつり」		12/1(金) 5-6限目 活動報告プレゼン資料作成 (整理・考察・産業活性化の政策構想) @教室		
	12/1(金) 5-6限目 プレゼンテーション練習 @教室		12/6(水) 3-4限目 プレゼンテーション練習 @教室		
	12/8(金) 4-6限目 活動報告(学習発表会) @高野山大師教会 中講堂		12/8(金) 4-6限目 活動報告(学習発表会) @高野山大師教会 中講堂		

図4 2023年度の「ふるさと学習」の実施内容

いたイメージ」,「来訪した際の第一印象」,「良かったところ」,「再訪したいか」,「何月に来たいか」を質問した。インタビューを通じて、観光客の関心が高い場所は奥之院と壇上伽藍と金剛峯寺の三大名所に集中し、その他の場所への関心の広がりが見えなかった。

2,3年生の生徒らは授業テーマ「高野山の奥深い魅力を世界の人々に伝えるフードをつくろう」を受けて、「高野山で食べた昼食」,「美味しかったもの」,「高野山を連想する食べ物」,「高野山にあったらいいと思う食べ物」,「高野山で買ったもの」,「和菓子が洋菓子どちらが好きか」,「高野山全体で改善してほしいところ」を質問した。インタビューを通じて、観光客の高野山の食に関する認識は胡麻豆腐や精進料理に焦点が当たり、伝統を尊重しながらも気軽に楽しめるものを望む人と、伝統的な形式に忠実なものを望む人がいることがわかった。

6.2.2. STEP2: 社会実験プロジェクトの計画と実行

まず初めに生徒らは社会実験の協力者による講義を受講し、彼らと共に社会実験の実施内容を検討したうえで、社会実験を実施した。検討段階では、地域住民への取材やアイデアコンペなどを実施してプロジェクトの精度を高める手順を踏んだ。

1年生の生徒らは、初回の授業において、高野町の観光政策の現状と課題について町長から説明を受けたあと、5人1組の4グループに分かれて役場職員の助言を得ながら謎解きガイドブックのテーマを検討した。この段階で「空海の人生」「高野山の神社」「高野山の参詣道」「高野山の祭り」の4テーマが確定した。2回目の授業では、高野山に関連する各種資料を参照して、ガイドブックのコンテンツ検討に取り組んだ。3回目の授業には、情報収集として金剛峯寺の職員への取材が教員Eの判断で行われ、4回目の授業ではその情報を基にガイドブックの内容・構成の検討及びデジタル企画書の作成が実施された。5回目の授業には、製品化候補となるガイドブックのアイデア選定コンペティションが町長、教員、筆者の審査のもとで開催され、「高野山の神社」と「高野山の参詣道」が製品化の対象として選ばれた。6回目の授業以降、生徒は10人1組の2グループに再編成され、ガイドブック製作に取り組んだ。完成したガイドブックは生徒らが観光客へ配布し、観光客による内容の評価はGoogleフォームを通じて収集した。

2,3年生の生徒らは、初回の授業において、胡麻豆腐店主から高野山の歴史・文化と新たな発想を組み合わせた商品作成の心得についての講義を受けた。その後、5人1組の4グループに分かれ、新しい高野山フードの商品アイデアを検討し、2回目の授業で生徒らは「胡麻豆腐カレー」「胡麻豆腐パフェ」「胡麻豆腐三色だんご」「胡麻豆腐トウカンロン」のアイデアを確定した。3回目の授業には、店主提供の自己評価シートを使用してアイ

ディアの具体化を進め、商品企画書を作成した。続く4回目の授業では、製品化を目指す商品アイデアを2つ選定するコンペティションが胡麻豆腐店主の提案で開催され、店主、教員、栄養士、筆者が審査員として「胡麻豆腐パフェ」と「胡麻豆腐三色だんご」の商品化を決定した。評価基準としては、高野山の歴史・文化の反映度、胡麻豆腐の新しい食べ方の独創性、及び収益性が考慮された。5回目の授業には、10人1組の2グループに再編成され、生徒らは2案の商品アイデアを更にブラッシュアップし、「胡麻豆腐パフェ」は「五色幕パフェ」として、「胡麻豆腐三色だんご」は「空海的一生」として商品化することを決めた。6回目の授業には商品の設計図を作成し、7・8回目には店主の協力を得て試作品を製作した。試作品は店のスタッフによる試食評価を受けた。9・10回目の授業では、評価結果をもとに商品レシピの微調整を行い販売価格を決定し、11回目以降には販売促進ツールの作成に取り組んだ。完成した商品は生徒らが観光客や地域住民向けに販売し、Googleフォームを通じて評価を収集した。なお、「五色幕パフェ」の具材には隣町・橋本市より無償提供された柿が使用されており、橋本市で開催される「まつせ・はしもと〜柿まつり〜」においても出店した。

6.2.3. STEP3: 社会実験の検証・まちづくり政策の立案

社会実験を通じて得られた観光客のアンケート結果を基に考察を行い、まちづくり提案を検討している。1年生の生徒は、謎解きガイドブックが地域の活性化や観光振興に与える影響を中心に考察し、高野山の魅力をどのように観光客に伝え、彼らの経験を向上させるかを検討している。一方、2,3年生の生徒は、新たに開発したスイーツが地域産業の振興や国内外への情報発信にどのように寄与するかを考察し、伝統産業の継承と発展のための具体的な方法を検討している。12月上旬まで実施。

6.2.4. STEP4: まちづくり政策の提言・意見交換

生徒らが社会実験プロジェクトの内容と成果、そしてまちづくり提案をポスターセッション形式で地域住民らに発表する。12月上旬に高野山大師教会にて実施予定。

7. 生徒の学習効果

7.1. 生徒へのアンケート調査

各年度のプログラムの終了直後、生徒らに対し選択式と記述式のアンケート調査を実施した。主な質問項目は、(1) 学習を通じて新たに得た地域に関する知識、(2) まちへの愛情や誇り、(3) まちと自身の今後の関わり方、(4) 自身の成長を実感したタイミングである。

7.2. 各年度の生徒アンケートの結果

7.2.1. 学習を通じて新たに得た地域に関する知識

2020年度1年生の生徒は、弁天公園や観音堂などの特定の場所の歴史に関心を示す回答が8割を占めた。こ

これは、フィールドワークにより地域の特定の場所への理解が深まったことを示している。続いて2021年度1年生の生徒らは、高野山の独特な都市構造や豊かな自然環境、歴史的景観や環境保護の取り組みなど、都市全体の魅力や課題に関する幅広い知識を獲得したと回答している。これは、より広範囲にわたる地域の側面に生徒たちの関心が向いたことを示しており、都市としての高野山の理解が深まったことを示唆している。異学年交流活動を取り入れた2022年度は、各学年の生徒らが高野山の防災や伝統産業の後継者不足など、より多角的な視点から地域の問題を理解したことが回答から見受けられた。この変化は、異学年間の交流を通じて多様な視点から地域を考察する機会が提供された結果と考えられる。

7.2.2. まちへの愛情や誇り

まちへの愛情や誇りに対する生徒の感情は、年度ごとに顕著な変化を示している。2020年度1年生の生徒らは地域の特定の場所やイベントに関心を示す一方で、全体的な地域への愛情や誇りに関してはまだ深い理解に至っていなかった。しかし、2021年度には、各学年の生徒らの間で「愛着が高まった」「概ね高まった」と感じる割合が増加し、自然の豊かさや深い歴史など地域の特徴に対する誇りを強く感じるようになった。一方で、愛情に変化がなかった1年生の生徒もあり、彼は地域の課題が目立ってしまうために誇りを感じるができなかったと述べた。2022年度には、前年に地域への誇りを感じるができなかった生徒も含め、生徒らが高野山の観光客への魅力と努力を肯定的に評価するようになった。これらの結果は、まちづくり学習が生徒たちの地域に対する理解と感情に肯定的な影響を与え、学習を重ねるごとに地域への愛情や誇りが深まっていることを示している。このような変化は、まちづくり学習が生徒たちにとって地域への関わり方や認識を変える重要な手段となっていることを示唆している。

7.2.3. まちと自身の今後の関わり方

2020年度1年生の生徒らは、夜間(17時以降)の遊び場所の設置、公民館の建て替え、団地の公園や道路の整備など、自分たちの身近な環境改善に関心を示していた。これは、まちづくり学習のテーマが生徒らに具体的に身近な問題に焦点を当てていたことに起因すると考えられる。一方、2021年度1年生の生徒らは、日常生活を超えた高野町全体の課題に関心をもち、人口減少の原因解明や対策、空き家活用、ウォークアブルなまちづくり、新旧文化融合のまちづくりなど、より広範囲で複雑な都市問題に取り組む意欲を示した。これは、地域住民や行政職員らとの関わりを通じて生徒らが地域の課題に対する理解を深め、より包括的な視野で考えるようになったことを反映している。さらに、2022年度には、各学年の生徒らは、伝統産業の継ぎ手増加などの具

体的なアイデアを提案するだけでなく、自分たちの発信力を高め、リーダーシップを発揮し、他者とのコミュニケーションを重視することに意欲を見せた。これは、異学年交流を通じて、生徒たちが自分たちの役割や能力についてより深く考え、地域へのより積極的な関わりを志向するようになったことを示唆している。

以上から、まちづくり学習が年度を経るごとに生徒らの地域に対する関わり方に肯定的な変化をもたらしたことが明らかになった。学習の進展に伴い、生徒たちの地域への視点は、単なる環境改善から広範な都市問題の理解、さらには自己成長と地域への実践的な貢献に至るまで、着実に深まりつつあることが示されている。

7.2.4. 自身の成長を実感したタイミング

2021年度1年生の生徒らは、役場職員から自分たちの提案に関する問題点を指摘された際に成長を実感したと述べている。このことは、地域社会との直接的なコミュニケーションが生徒の自己成長に重要な影響を与えたことを示している。一方、2022年度の各学年の生徒らは、異学年間の交流活動を通じて成長を実感し、特に3年生を中心にプロジェクトを進めた結果、より良い提案ができたことに満足感と楽しさを感じたと述べている。これは異なる学年の生徒たちが協力することで、新しい視点やアイデアが生まれ、生徒たちの成長を促進したことを示している。以上から、地域社会との直接的な交流と異学年間での協働が、生徒たちが自身の成長を実感する上で重要な役割を果たしていることが明らかになった。

7.3. 教員の評価

指導者による生徒の学びの評価を把握するため各年度の担任教師に対して聞き取り調査を実施した。その結果、2020年度の担任教員である教員Aは、従来のふるさと学習が主に調べ学習に基づいていたのに対し、課題解決型の学習プログラムを通じて生徒の想像力や問題解決能力、表現力が向上した点を高く評価している。また、このアプローチにより通常は消極的な生徒も意見を積極的に述べるようになり、新たなリーダーシップが形成され、自信を持つ生徒が現れたという。また、2021年度の1年生の担任教員である教員Cは、地域住民へのインタビューや役場職員とのワークショップ、タウンミーティングへの参加を通じて、生徒が多様な価値観に触れる機会が提供されたと評価している。これにより、生徒たちの都市理解が深まり、実現可能な提案がなされたことも強調されている。また、生徒間の協力と学び合いが促進され、個々の生徒が自信をつけることができたと述べている。また、2022年度の担当教員C、D、Eは異学年間の協働がもたらした学生の相互意識の高まりと学習効果について肯定的に評価している。これらの教員は、生徒らが地域問題解決に向けた議論に積極的に参加し、自主的に活動する姿勢を示したことを高く評価している。特

に、3年生がリーダーシップを発揮し、異学年間のコミュニケーションを促進したことが、全体の生徒たちの積極性の向上に寄与したと指摘している。また、発表会において保護者や地域住民との意見交換が行われ、それが生徒らの地域への愛着を高めたと教員らは述べている。これらの点から、異学年間の協働と地域社会との直接的なやり取りが、生徒たちの学習経験に重要な影響を与えていることが伺える。

8. 「ふるさと学習」の4年間の展開に関する考察

以上、2020年から2023年までの4年間にわたる高野山中学校の「ふるさと学習」のプログラムの変遷を明らかにした。まず初年度である2020年には、1年生を対象にフィールドワークを中心とした学習を実施した。授業では、生徒らにより公共空間の改善をテーマにしたアイデア提案が行われたが、地域との実質的な関わりは町長による講義に限定されていた。続く2021年度では、実施対象を全学年に拡大し、地域との関わりを深める学習を実施した。1年生の授業では、地域住民との対話を重視するタウンウォッチングを取り入れ、さらに役場職員の提案を受けて役場職員とのワークショップの実施やタウンミーティングへの参加を試みた。しかし、一部の限られた住民によるフィードバックしか得られないという課題が残った。また、2年生の授業では地域産業の実体験を取り入れたプログラムを実施し、3年生の授業では、生徒がまちづくり提言書を作成して町長へ提出する活動を実施した。しかしながら、学年間での学びの共有が不足し、まちづくり学習の活動成果が蓄積されないという点が課題として浮上した。これを受けて、2022年度には異学年交流活動を取り入れて学年間の交流を促進するとともに、地域の多様なステークホルダーとの対話を強化するプログラムを実施した。その結果、生徒間の議論が活発化し、生徒各々の過去の学習経験を踏まえてアイデアが具体化され、まちづくり提案に対する地域住民からの評価も向上した。4年目の2023年度は、前年度に生徒が住民へ発表した提案の一部をアクションに移す社会実験プロジェクトを核とした実践的なまちづくり学習を実施しており、役場や地域企業からの支援を受けて進めている。

このような4年間の変遷を通じて確認されるのは、地域と学校の継続的な協働が、生徒および教員、筆者、住民の相互の理解を促進させ、まちづくり学習のプログラムの質や効果を高める重要な要因となっていることである。このことから、学校が地域の資源やニーズを敏感に捉え、それを学習プログラムに柔軟に取り入れていくことが、地域との協働に基づくまちづくり学習の発展的な展開を可能にするとと言える。

謝辞

研究に際し多大な御協力を頂いた高野山中学校教職員の皆様に心から謝意を表します。

注

- 注1) まちづくり学習の実施による生徒の学習効果を分析する研究として、例えば、参考文献1)がある。
- 注2) 「総合的な学習の時間」は、1996年の中央教育審議会答申及び、1998年の教育課程審議会答申において創設が提言され、同年に改訂された学習指導要領に位置付けられ、小中学校では2002年から全面実施されている。参考文献3)によると「総合的な学習の時間」は、「知識伝達型」の教育から、学習プロセスを重視する「探求創出表現型」の学習観への変革の理念のもとで導入された。
- 注3) 例えば、参考文献7)8)がある。
- 注4) 教育行政では2017年告示・2021年度全面実施の学習指導要領において、社会と連携・協働しながら未来の創り手となるために必要な資質・能力を育む「社会に開かれた教育課程」の実現が謳われており、地域連携の重要性が認識されている。
- 注5) 参考文献12)によると、プレイスメイキングは、「都市空間において愛着や居心地の良さといった心理的価値を伴った公共的空間を創出するボトムアップ型の計画概念」と定義されている。
- 注6) 参考文献15)によると、タクティカル・アーバンイズムは、短期の社会実験として始められ、段階的に場の運営を見越した暫定的な利用へと進展するプロセスの中で、利用者も意見を出しながら積極的に参加し、場所への愛着を深め、より良い居場所の創出を目指す手法とされている。

参考文献

- 1) 柳沼葉子、市川健太、岩倉成志、野中康弘：日本橋常盤小学校における「まちづくり学習」の授業効果の持続性―授業実施5年後のパネル調査―，土木学会論文集H(教育)，Vol.69，No.1，pp.9-20，2013
- 2) 日本建築学会編：まちづくり教科書6 まちづくり学習，丸善出版，2004.9
- 3) 小澤紀美子：環境教育指導資料の重層的な継承，日本環境教育学会環境教育，Vol.17(2)，p19-25，2007.11
- 4) 陣内雄次：住まい・まちづくり学習とSDGs―その可能性と課題を探る―，宇都宮大学教育学部教育実践紀要，No.6，pp.201-208，2019.8
- 5) 大西律子，富沢浩樹：市民のためのまちづくり学習プログラムの基本設計に関する研究，目白大学総合科学研究，Vol.3，pp139-152，2007.

- 6) 伊藤裕康：「まちづくり学習」の動向と課題－総合的な学習の時間を中心にして－，文教大学教育学部紀要，Vol.54，pp.27-42，2020. 12
- 7) 辻喜彦，出口近士，吉武哲信：小学校の総合学習時間を活用したデザイン教育とまちづくりの連携の可能性に関する考察－宮崎県日向市立富高小学校における「日向市活性化塾」を題材として－，日本都市計画学会都市計画論文集，No.42-3，pp.199-204，2007. 10
- 8) 小林彩香，室田昌子：小学校における地域の歴史・文化資源を教材としたまちづくり学習の有効性と課題，日本都市計画学会都市計画報告集，Vol.11，No.4，pp.164-167，2013. 10
- 9) 丹野勝太，白木里恵子：まちづくり学習活動における主体とその類型に関する研究，日本建築学会大会（九州）学術講演梗概集，pp.63-64，2016. 8
- 10) 中島喜代子，長谷川千恵子：住民参画意識を育成するまちづくり学習，三重大学教育学部附属教育実践総合センター紀要，Vol.31，pp.21-29，2011. 3
- 11) 浦井亮太郎，橋田竜兵，菊地成朋：まちづくり学習の導入過程とその実施による生徒の学びの把握－高野山中学校「ふるさと学習」の実践を通じて－，日本建築学会技術報告集，Vol.28，No.70，pp.1635-1640，2022. 10
- 12) 園田聡，倉田直道：公共空間の創出におけるPlacemaking手法に関する基礎的研究－地方都市中心市街地を対象として－，日本建築学会大会（東海）学術講演梗概集，pp.1153-1154，2012. 9
- 13) 西川純，山田純一：異学年同士が学び合う有効性－同学年・2学年・3学年の小グループ比較を通して－，日本学校教育学会学校教育研究，Vol.20，pp.189-200，2005. 8
- 14) Project for Public Spaces, The Placemaking Process HP(<https://www.pps.org/article/5-steps-to-making-places>) (acesed 2023.10.22)
- 15) 泉山壘威，荒井詩穂那，原万琳：タクティカル・アーバニズムの概念整理－日本のパブリックスペース利活手法への導入可能性－日本建築学会大会（中国）学術講演会梗概集，pp.339-342，2017. 8

（受理：令和 5 年 10 月23 日）

